本の森

木村英造　淡水魚にかける夢
（上野敏彦著、平凡社）

キーマンの書棚

河川環境保護に力

両毛漁協組合長
中島　淳志さん（39）
桐生市川内町

今年2月、38歳の若さで両毛漁協の組合長に就任した。内水面漁業の発展や河川環境の向上に力を注ぐ一方、釣り具メーカー主催のイベントなどでフライフィッシングの講師なども務めている。

物心ついた時から近くの川で遊んだり、釣りをしたりして育った。とにかく釣り好き。

「釣りができる場所をと考えて大学を選んだ」と冗談交じりに言うが、大学を卒業したころから、河川環境の悪化や魚がいなくなっていくのを意識するようになった。

本書との出合いは2007年のこと。長野県で人が入らないような小さな渓流を訪れた時、動植物の調査研究を行っている写真家と出会い、勧められたのがきっかけだ。

木村英造さんは、絶滅が危惧される天然記念物の小魚、イタセンパラの保護運動や淡水魚保護協会の設立などに取り組んできた人。読んで「木村さんの行動力とパワーに驚かされた」と振り返る。

漁協の仕事を続けてきたのは、時代とともに河川の環境が変化し、資源量も変わっていく中で「何とかしなくては」との思いがあったため。「やり続けている先輩がいる。やり続けることで、素晴らしい人たちが集まってくるんだ」と感じたという。

漁協の運営には、河川の現場、生態系、法律、それぞれの知識が必要となる。生命感あふれる川にしていくために、地域の団体などと連携しながら、正しい知識を広げ、多くの人たちの理解を深めていくことが大切だと感じている。

「木村さんのエネルギーのすごさを感じる」という中島さん